

史跡飛鳥宮跡（飛鳥京跡第 191 次） 発掘調査成果報告

奈良県立橿原考古学研究所

令和 7 年 3 月 17 日

-
- 調査地 高市郡明日香村大字岡 257-1・261-1・262-3
 - 遺跡番号 史跡飛鳥宮跡（遺跡地図番号：14D-0037-A）
 - 事業名 飛鳥宮跡・飛鳥京跡苑池整備活用事業（国庫補助事業）
 - 事業者名 奈良県
 - 調査期間 令和 6 年 10 月 28 日～令和 7 年 1 月 24 日
 - 調査担当

調査部	部長	鈴木裕明
調査課	課長事務取扱	鈴木裕明
	調査第二係長	岡田憲一
	指導研究員	東影 悠（現場担当）
	技師	富田 樹（現場担当）
 - 調査面積 385 m²
 - 主な遺構 飛鳥時代の掘立柱建物・掘立柱塀・石組溝
 - 主な遺物 土師器、須恵器、瓦
 - 要 旨 史跡 飛鳥宮跡（飛鳥京跡第 191 次調査）内郭の北西隣接地において、飛鳥時代後半（III-B 期：飛鳥浄御原宮）の特徴的な構造をもつ大型掘立柱建物を確認したのに続き、その南に接する同じ柱筋をもつ大規模な総柱建物を新たに検出した。先に検出した大型掘立柱建物と同時に機能した建造物と考えられ、さらに南にも軸を揃えた同じ柱筋をもつ別の掘立柱建物があることから、3 棟の建物が計画的に配置されたことが判明した。飛鳥宮跡の内郭北側での宮殿構造を解明する手がかりが得られたことは重要な成果である。

※ 現場は埋め戻されており、現地説明会はありません。

I. はじめに

史跡 飛鳥宮跡は、飛鳥時代の宮殿遺跡である。これまでの調査研究により、Ⅰ～Ⅲ期の3時期の宮殿遺構が重複して存在することが判明しており、Ⅰ期遺構が舒明天皇（在位 629～641年）の飛鳥岡本宮、Ⅱ期遺構が皇極天皇（在位 642～645年）の飛鳥板蓋宮、Ⅲ期遺構のうちⅢ—A期が斉明天皇（在位 655～661年）・天智天皇（在位 668～671年）の後飛鳥岡本宮、Ⅲ—B期が天武天皇（在位 673～686年）・持統天皇（在位 690～697年）の飛鳥浄御原宮と考えられている。このうち、飛鳥時代後半にあたるⅢ期遺構の様相が、遺跡の上層面に位置することから最も明らかとなっている。

飛鳥京跡の発掘調査は、1959（昭和 34）年度の奈良国立文化財研究所と奈良県による予備調査を経て、1960（昭和 35）年度の第1次調査以降、奈良県立橿原考古学研究所が主体となり、継続的に実施している。1972（昭和 47）年には、検出された遺構が確実に古代の宮殿関係のものであるとして、国の史跡に指定された。

今回の調査は、奈良県による飛鳥宮跡・飛鳥京跡苑池整備活用事業に伴うもので、飛鳥京跡第191次調査にあたる。調査区は、北に2009（平成 21）年度の第165次調査区、東に1967（昭和 42）年度の第13次調査1区および1972（昭和 47）年度の第34次調査区、南に1967（昭和 42）年度の第13次調査2区および2022（令和 4）年度の第189次調査区がそれぞれ位置する。

今回の調査区は、飛鳥宮跡Ⅲ期遺構内郭の北西隣接地に位置する。主要な調査目的は、第165次調査で検出した大型掘立柱建物 SB0934 の平面規模を確認することである。大型掘立柱建物 SB0934 の平面規模を明らかにし、11月30日・12月1日の両日に現地説明会を実施した。その後、調査区の南側を拡張し、大型掘立柱建物 SB0934 の南側を調査した。その結果、大型掘立柱建物 SB0934 の南で新たに掘立柱建物 SB02402 を確認した。

調査期間は令和6年10月28日～令和7年1月24日、調査面積は385 m²（拡張前：200 m²、拡張：185 m²）である。

II. 調査成果

主な検出遺構（③～⑤が前回の報道発表後に新たに判明した遺構）

① **大型掘立柱建物 SB0934** 今回の調査では SB0934 の南東部（東西6間×南北3間分）を検出した。第165次調査の成果を踏まえると、身舎の東西南北4面に廂が付く四面廂建物となり、廂を含めると東西11間（約35.4m）×南北5間（約15.0m）の大規模な東西棟になる。国家座標に対する振れはなく、概ね正方位である。身舎の柱掘方の平面形は隅丸方形で規模は一辺1.7m、深さ2.0m、廂の柱掘方の平面形は隅丸方形で規模は一辺1.5m、深さ1.5mとなる。いずれも柱は抜き取られている。身舎の柱抜き穴埋土に、径50～60cmの大型の石が顕著に含まれる。柱抜き穴から推定される柱間寸法は、身舎、廂ともに約3.0m（10尺）を基本とし、桁行方向では身舎の最も外側の両脇間のみが約4.2m（14尺）となる。

② **石組溝 SD02401** 調査区の北東で検出した南北方向の石組溝で内法幅は約90cmである。底石には直径約10～20cmの小礫、側石には直径約40cmの石がもちいられている。SD02401はSB0934の柱穴および柱抜き穴に壊されており、本調査では断続的に3箇所で総長約2m

分を検出した。国家座標に対する振れはなく概ね正方位である。その構造的特徴から飛鳥宮跡Ⅱ期遺構となる可能性が高い。

③ 掘立柱建物 SB02402 調査区の南半、SB0934の南約2.4mで検出した総柱建物である。今回確認した範囲では、柱抜取穴および柱穴を合計35基確認し、東西7間以上×南北4間以上となる。ただし、その東西および南は調査区外へとさらに続いていくことから全体の規模は不明である。国家座標に対する振れはなく概ね正方位である。

柱掘方の平面規模は隅丸方形で規模は一辺1.7m、深さ1.4mである。いずれも柱は抜き取られていた。柱抜取穴から推定される柱間寸法は約3.0m(10尺)を基本とし、東西方向ではSB0934の両脇間に相当する位置は約4.2m(14尺)となり、南北の柱筋はいずれもSB0934と通りが一致する。SB0934の東の廂に相当する位置にも柱抜取穴を確認したことから、東西はSB0934と同様に11間となる可能性が高い。また、南北は現状では4間分を確認していたが、調査区の南へとさらに続いていく可能性がある。西側(SB0934と同規模の場合、残り柱穴4列分と想定)および南側は未調査であり、今後の調査によって確定する必要がある。

④ 掘立柱建物 SB02403 調査区の南東で検出した東西棟の掘立柱建物である。東西6間×南北2間となる。国家座標に対する振れはなく概ね正方位である。柱掘方の平面規模は隅丸方形で規模は一辺1.4m、深さ1.2mである。いずれも柱は抜き取られている。柱抜取穴から推定される柱間寸法は約2.4m(8尺)を基本とする。柱穴はSB02402と一部で重複し、SB02402より新しい。

⑤ 掘立柱塀 SA02404 調査区の西で検出した南北方向の掘立柱塀であり、南北4間分を確認した。国家座標に対する振れはなく概ね正方位である。柱掘方の平面規模は隅丸方形で規模は一辺1.0m、いずれも柱は抜き取られているとみられ、埋土には橙色粘質土が顕著に含まれる。柱間寸法は約1.8~2.4mである。柱穴はSB02402と重複し、SB02402より新しい。

Ⅲ. まとめ

遺構の時期 Ⅱ期遺構である石組溝SD02401を壊して大型掘立柱建物SB0934が造られていることから、SB0934はⅢ期遺構と位置付けられ、第165次調査の成果も踏まえるとⅢ-B期となる可能性が高い。また、SB0934の南に近接する掘立柱建物SB02402は、SB0934と南北に柱筋を揃えることから同じくⅢ-B期のものと想定される。さらに、SB02402と重複し、SB02402の廃絶後に造られた掘立柱建物SB02403および掘立柱塀SA02404はⅢ-B期よりも新しく位置付けられる可能性がある。

大型掘立柱建物 SB0934 の規模 SB0934の南東部を平面的に検出し、廂を含め桁行11間(約35.4m)×梁行5間(約15.0m)の飛鳥宮跡最大の四面廂建物となることが確定した。従来、飛鳥宮跡最大の建物はエビノコ郭の掘立柱建物SB7701(四面廂建物:桁行9間(約29.2m)×梁行5間(約15.3m))であったが、SB0934はこれを上回る。

大型掘立柱建物 SB0934 の構造 四面廂建物で身舎の両脇間のみが他の柱間に比べて広く作られるというSB0934の特徴は、平城宮の内裏Ⅰ期御在所正殿SB4700(四面廂建物:桁行11間(約36.6m)×梁行5間(約16.2m))および内裏Ⅰ期内裏正殿SB460(四面廂建物:桁

行 11 間 (約 36.6m) × 梁行 5 間 (約 16.2m)) などと共通する。SB0934 の特殊な平面構造は、藤原宮の様相が不明なものの、平城宮の御在所正殿の先駆けと評価できる。

大型掘立柱建物 SB0934・掘立柱建物 SB02402 と周辺建物の配置 今回の調査区の南約 10m では、第 13 次調査 (昭和 42 年度) で掘立柱建物 SB6715 (桁行 3 間 (10m) 以上 × 梁行 2 間 (約 6.0m))、第 189 次調査 (令和 4 年度) で掘立柱建物 SB02201 (桁行 3 間 (10m) 以上 × 梁行 2 間 (約 6.0m)) をそれぞれ確認しており、ともに SB0934 および SB02402 と柱筋の通りがほぼ一致する。SB6715 と SB02201 の中間部分は未調査であるが一つの建物となる可能性が高く、内郭北西隣接地においては軸を揃えた南北 3 棟の掘立柱建物が計画的に配置されたと考えられる。なお、これら 3 棟の建物群を取り囲む区画施設の存在は不明であり、今後の調査で確認する必要がある。また、内郭との関係についても今後の検討課題である。

今回の調査の評価 大型掘立柱建物 SB0934 は、平城宮の御在所正殿・内裏正殿へとつながる要素を有し、飛鳥宮跡Ⅲ-B 期にその原型が出現したと評価できたことは重要である。また、SB0934 に隣接して掘立柱建物 SB02402 が検出されたことも重要な成果といえる。南北に隣接する 2 棟の建物は、柱筋の通りが一致するものの、SB0934 は側柱建物、SB02402 は総柱建物と構造が異なる。側柱建物と総柱建物が隣接して造られた宮殿建物の事例としては、平城宮の大極殿院Ⅱ期の正殿が挙げられる。SB0934 と SB02402 の柱穴の特徴の違いが、建物の上部構造や機能とどのように関連するのかは、今後の検討課題である。さらに、SB0934 を中心として軸を揃えた南北 3 棟の計画的な建物配置が内郭北西隣接地で確認されたことも極めて重要な成果といえる。内郭外である外郭に大型建物群がⅢ-B 期に展開することは、エビノコ郭が内郭の南東隣接地に造られたこととも連動した動きであった可能性が考えられる。

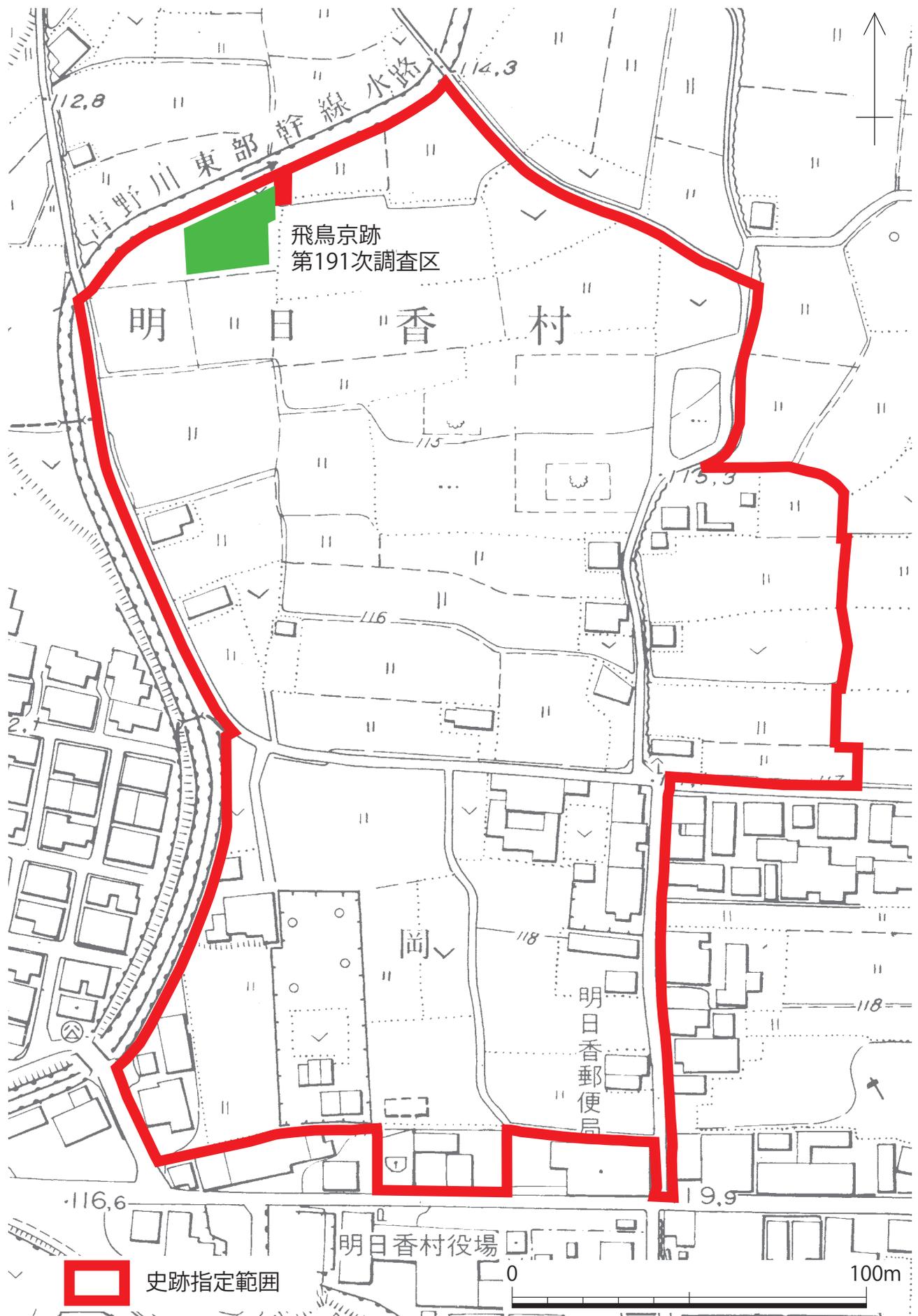
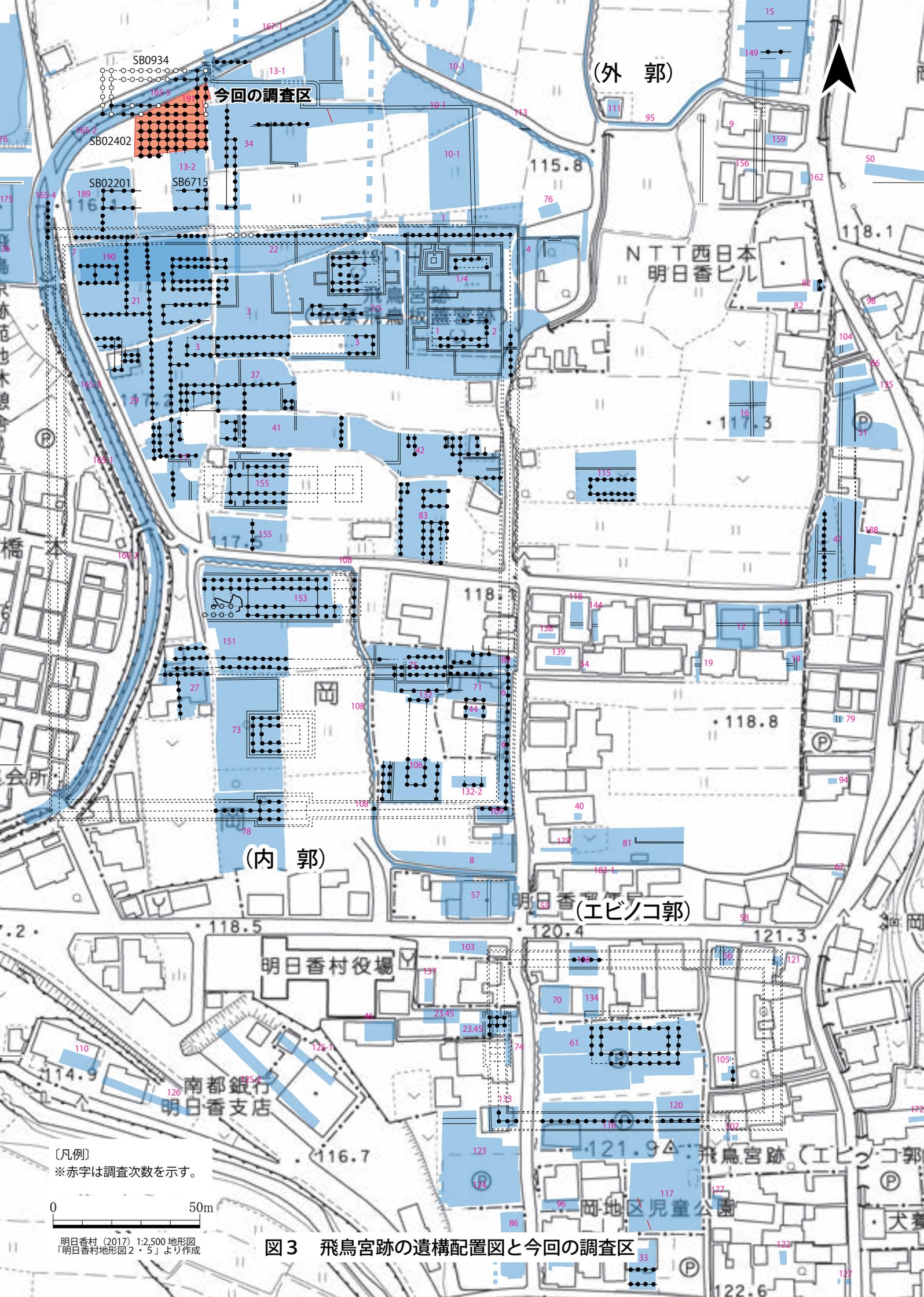


図2 史跡飛鳥宮跡の範囲と今回の調査区



今回の調査区

(外 郭)

(内 郭)

(エビノコ郭)

〔凡例〕
 ※赤字は調査次数を示す。

0 50m

明日香村 (2017) 1:2,500 地形図
 「明日香村地形図2・5」より作成

図3 飛鳥宮跡の遺構配置図と今回の調査区

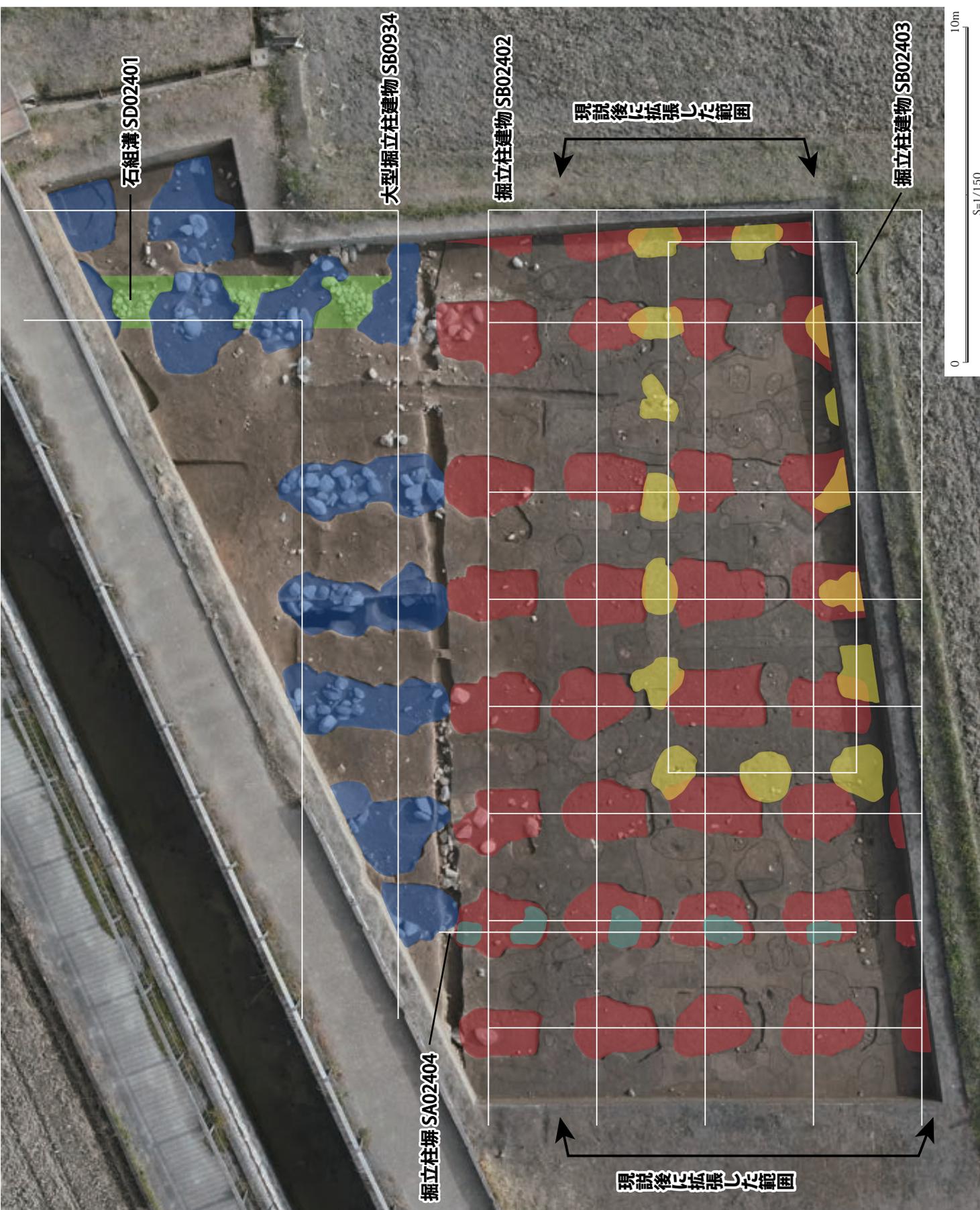


図4 今回の調査区と遺構の検出状況（上が北）

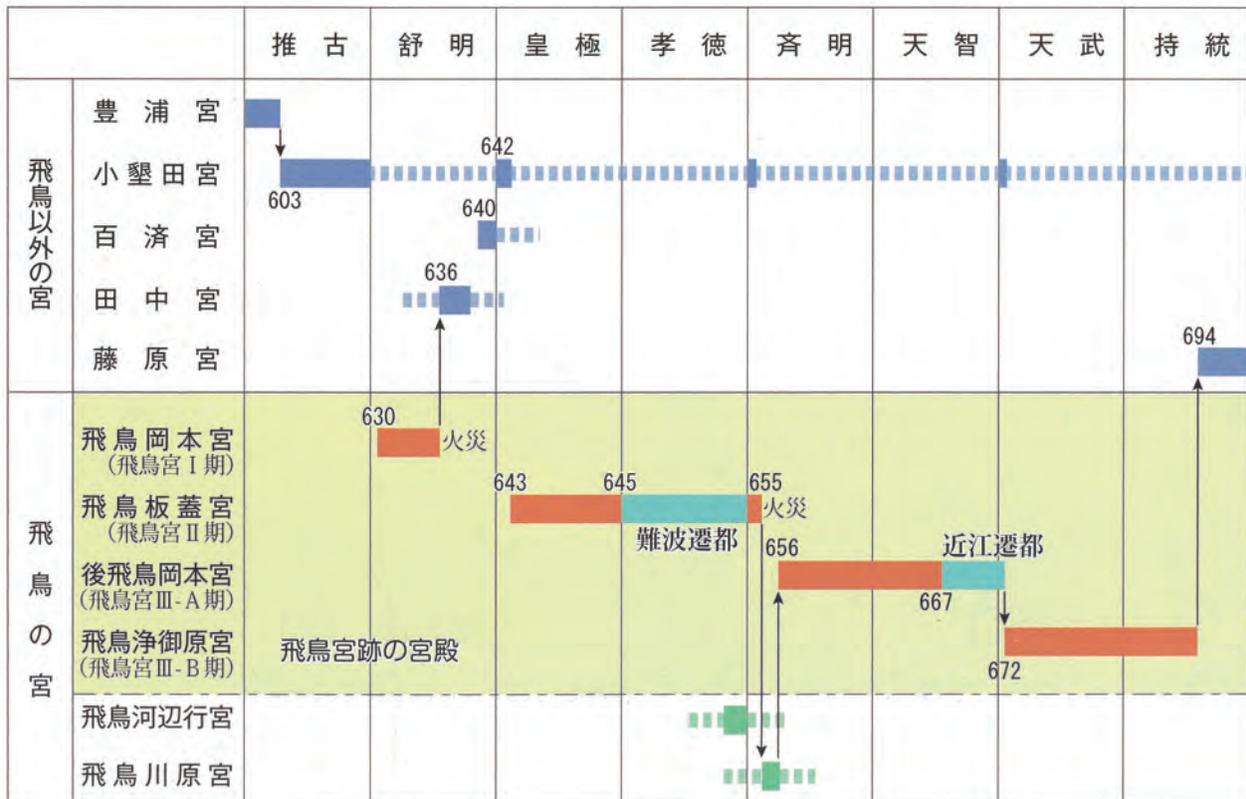
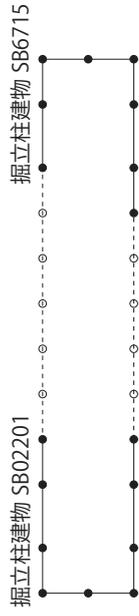
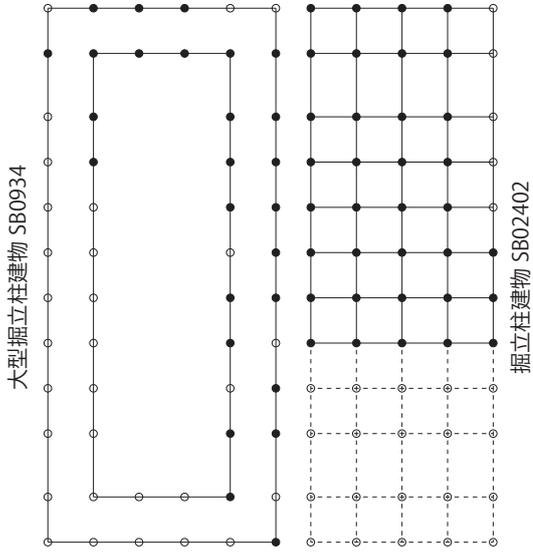


図5 飛鳥時代における宮の変遷

出典：奈良県立橿原考古学研究所附属博物館 平成26年秋季特別展・特別陳列『飛鳥宮と難波宮・大津宮』図録

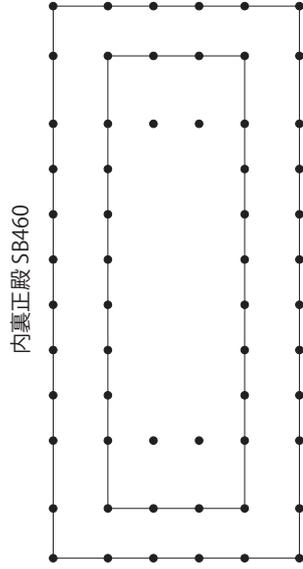
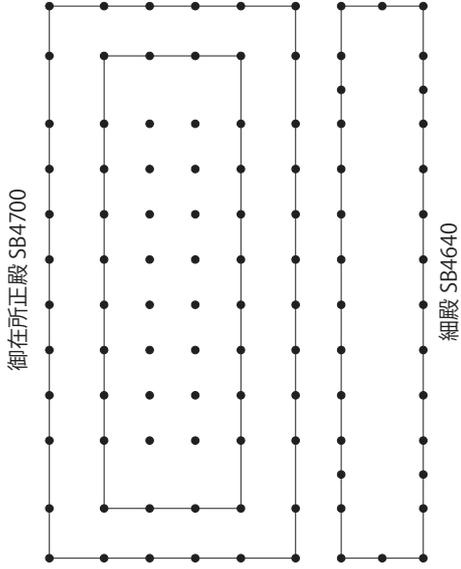
飛鳥宮跡 III-B 期 (飛鳥浄御原宮：672 年～)



北一本柱列 SA5901



平城宮跡内裏 I 期 (710 年～)



平城宮跡大極殿院 II 期 (753 年～)

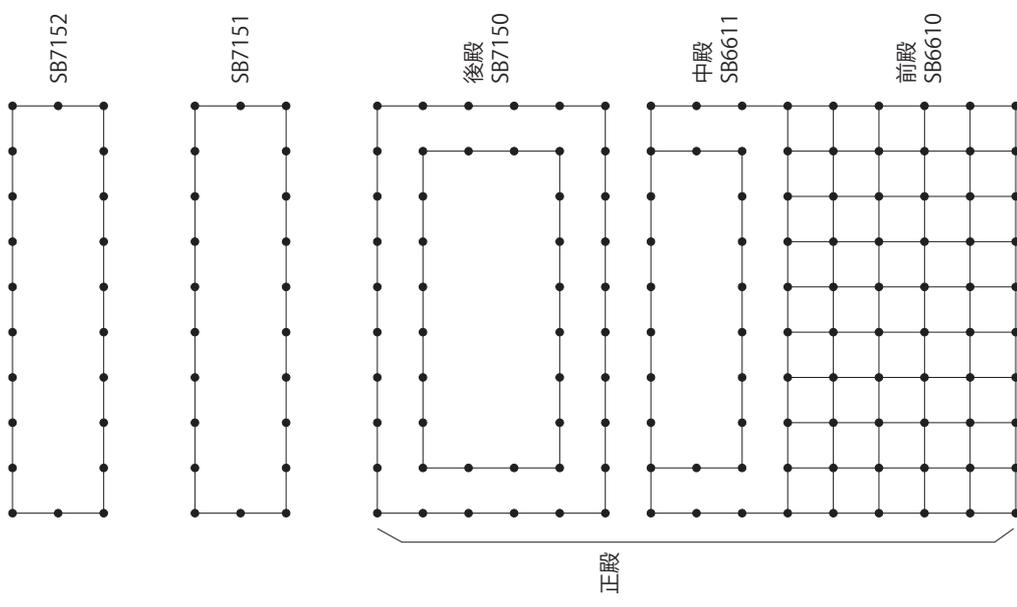


図 6 飛鳥宮跡 SB0934 周辺の建物配置と建物構造・建物配置の類例 (いずれも部分抜粋)



写真1 調査地遠景（南から）



写真2 調査地遠景（西から）



写真3 調査地全景（南西から）



写真4 掘立柱建物 SB02402（西から）



写真5 掘立柱建物 SB02402 (南東から)



写真6 掘立柱建物 SB02402 柱抜取穴 (北から1列目) 断面 (西から)



写真7 掘立柱建物 SB02402 柱抜取穴（北から2列目）断面（西から）



写真8 掘立柱建物 SB02402 柱抜取穴（北から3列目）断面（西から）



写真9 掘立柱建物 SB02402 柱抜取穴（北から4列目）（左）と掘立柱建物 SB02403 柱抜取穴（右）の重複状況（西から）



写真10 掘立柱塼 SA02404（南から）